

人のために豊かさや便利さを提供する土木を、生活のなかに浸透させていくこと。
「DOBOKU×カルチャー」では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、そんなコンテンツを紹介します。

第 四 回

『マンホール蓋』



1. 渋谷の道玄坂にある。渋谷のハチ公と走る人が凹凸でデザインされている
2. 足立区の区道に設置されたメーカーオリジナルのパターン
3. 四季と天気の変化がデザイン化されている
4. 下水道施設の「汚水枡」の蓋。戦前のものと思われる
5. 「芝浦分譲地」と記されている。明治43年頃、芝浦における埋め立て工事の際のものと思われる
6. 東京大学構内にある蓋に「帝大下水」と記されている。明治30年以前のものとの可能性がある
7. 中央に「東京府」のマークがある。昭和6年から18年まで府道として敷設された道路に使われた

近年、なぜか「マンホールの蓋」という土木ツールに注目が集まり、都内や全国でさまざまな種類のものを写真に撮り収集するマニアも増えている。その「マンホールの蓋」に、今から四五年以上も前から注目していた人が林丈二さん。現在はその分野の入門書ともなっている『マンホールの蓋 日本篇』の著者でもある。

林さんは武蔵野美術大学工芸工業デザイン科の学生時代、都市を構成するデザインを研究する課題を与えられたのをきっかけに「マンホールの蓋」に興味を持った。

「目立たない存在だけど、よく見ると味わいがある。古いものは年月を経て表面が摩耗し、ものの風合いがあらわたりするところに魅力を感じたんですよ」

その後もマンホール蓋に注目し続け、キャラクター商品のデザイナーをしながら、東京都内をはじめ日本中の主な都市のマンホール蓋を探索。



林さんの「マンホールのふた」は、行政機関がマンホールの調査をする際の参考資料にもなったと言う

一九八四年、三七歳の時に『マンホールの蓋 日本篇』を刊行。铸件の街である埼玉県川口市でマンホールの蓋を作り続けてきた中山製作所の職人さんから聞き取り調査をする等、マンホール業界の人々の協力も得ながら世に出た一冊だった。続いて、西ヨーロッパ一三カ国を探索し、八六年に「マンホールの蓋 ヨーロッパ篇」も刊行。

「東京で最も早く水道インフラが整備された旧一五区（千代田、中央、港、台東、文京、新宿区と江東区の一部）のエリアには、昭和の末頃まで明治、大正、戦前の古いマンホールがけっこう残っていました。そのなかでも千代田区神田にあった鑄鉄製格子形のもものは、下水道内で発生するガスを地上に

逃がすためのシンブルなデザインでしたが、その後開発された「東京市型」は、地上からの砂利やゴミを受けるよう、外部のものが内側に落ちてこない工夫がされていたり、そのデザインには「用の美」も感じられます」

都内では旧東京市内や本郷の東京大学のキャンパス内等に古くからの独自のデザインが見られて、林さん好みのものが多く見つかったという。

近年は土木ブーム、日本全国のご当地ブームでそれぞれの自治体独自ののやカラフルな色使いの「デザイン・マンホール」というものが開花しているが、林さん好みのマンホールはその正反対のものらしい。

「マンホールは当初、ねずみ鉄鉄という材質で作られていましたが、その後アメリカで摩耗しにくく錆びにくいダグタイル鉄鉄が開発され、最近ほとんどがダグタイル製となり質感が変わりました。ぼくはねずみ鉄鉄製の古いものが好きでした」



1885 鋳鉄製格子形

東京最古の下水道「神田下水」に使われた鋳鉄製初と言われるマンホール蓋



1907 名古屋市型

名古屋市の創設下水道の専任技師だった茂庭忠次郎が考案。後に内務省土木局に入り、全国の上下水道技術を指導した際、この蓋を推め、東京市型と並んで全国的に拡散する



1958 JIS模様（JIS A 5506）

この年にマンホールの蓋のJIS規格（日本工業規格）が制定され、このデザインが蓋の基準モデルとなり全国に拡散していく

下水道用マンホール蓋の歴史

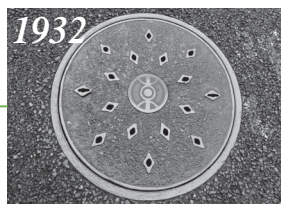
東京市型

全国の上下水道を指導していた中島鋭治が、東京市の下水道を設計するときに西欧のマンホールを参考にして考案。全国的に拡散していき、後のJIS模様のモデルとなる



小台型（森型）

戦時中の鉄不足に伴い、日本で初めて考案されたと言われるコンクリート製の蓋。ガス抜き穴がダイヤ型であることが特徴



各市町村による独自デザイン

建設省公共下水道課建設専門官が、下水道事業のイメージアップと市民アピールのために、各市町村に独自の蓋をつくることを提唱。そこから様々なデザインのマンホール蓋が登場する



マンホールの蓋のデザインに着目して、国内外問わず様々なマンホールの調査をしている林丈二さん。路上を観察し、特定のものに価値を見出した集団「路上観察学会」のメンバーでもある。

そんな林さんは自らを、「ぼくの役目は飽くまでも『マンホールの蓋』の世界への導き役」だとする。

「今、ぼくが本を出した頃からは考えられないほど『マンホールの蓋』に興味を持つ人が増えていて、それぞれぼくが思いもしない視点での観察をしている。驚きますね！」

現在は都内で毎年、マンホールの蓋好きが集まるイベント「マンホールナイト」が行われ、マニアの探索、収集の成果報告や街歩きイベント等も行われている。古きよきマンホールの蓋は更新により失われていく運命にあるが、今のブームとも言える現象で、そのデザインの質はより高まっていくことが期待される。